

卷 頭 言

フジコーに想う

新日本製鐵(株)技術開発本部
常務取締役副本部長

富 浦 梓
Tomimura Azusa



今回フジコーさんが会社設立40年を記念して、フジコー技報の発刊を決意された事に深い敬意を表したい。技報を継続的に発刊してゆくには、内部に相当の技術の蓄積がなければ不可能な事であり、フジコーさんと初めて出会った25年ほど前の事を思い出しながら些か感慨無量なるものを覚える。

もともと圧延部門の出身である私は、1967年から5年間に亘って君津製鐵所の建設と操業を仰せつかり、若さに任せて燃えるが如き情熱をこれに捧げた。10年を経ても世界最新鋭である事、と言うのが稲山社長から与えられた命題であり、これにどうやってお応えするか、社員はもとより多くの社外の方々のご協力も得たが、この時大変お世話になったのがフジコーさんである。当時は未だ連続鑄造草創の頃であり、20トンから40トンと言う巨大な鋼塊を作る必要があり、この鑄型をどうやってメンテナンスするかと言う大変な課題があったが、フジコーさんはこれに対して大変立派な技術を以って対応して下さいました。御蔭を以って君津製鐵所の大きく作って小さく分けると言う生産方式は、美事な完成を見た。

製造業を支えるものは技術であり、技術のなきところ企業の存続は有り得ない。この鉄則を文字通り実現して来られたのはフジコーさんであると思う。現実に造塊法に頼っていた製鉄業が雪崩をうって連続鑄造法に変化して行った時代において、鑄型の補修と言う主流事業部門から複合製品事業に展開され、それ以降も溶接材料事業に、更には機械加工、産業機械、エンジニアリングと業容を拡大しておら

れる。この変遷の過程をじっと見ていると面白い事に気がつく。つまりフジコーさんは基軸となる技術をしっかりと確保しておられ、常にこの中核技術からアメーバ的に触手を伸ばして発展し、決して技術を保有していないところに無闇に手を伸ばしているわけではないと言う事である。表面的には一見関係がないように見えても、その中心には長年に亘って蓄積された中核技術が見え隠れしている。世に安易な考えから事業の多角化を図り、失敗する例を多く見るにつけ、フジコーさんの己の腕の届く限り、と言う企業経営の哲学には美事なものを感じる。

さて、クリントン氏が「変化」を叫んで大統領選挙を戦い、美事に大統領の座を射止めた事は記憶に新しい。もろもろの飽和するところ、変化が生じるのは歴史を繙けば明らかかなところであり、旧套を墨守して変化に棹を差す者が減びて来たのもこれ又明らかな史実であろう。問題は、変化が忍び寄るのに気が付かず、ある日突然に気が付いた時には、既にして手遅れになっている事が多いと言う事であろう。変化とは、ある日突然に起こるように見えても、実はその予兆は相当に前からあるもので、それを如何に読み取るかが、重要である事は論を俟たないところである。しかしながらこれほどまでに多くの情報が溢れ、しかも多くの原因が複雑にからみあっている現代において、潮の流れのおもむくところを読みとる事は、吾人の能くするところではない。

ところで面白い話しを読んだ事がある。内容は、風景画の成立の歴史から始まる。かつて絵画の主題

はギリシャの神話とか新・旧の聖書、或いは王家の歴史等から取材されたものであったが、オランダにおいて初めて人が描写されていない風景画、静物画が誕生したのだそうである。それは、当時発達してきた商業によって利益を得た人達の家を建てた。ところが、壁に描く絵にハタと困った。成り上がり者には、人に見せて誇るほどの我が家の歴史があるわけでもなし、さりとして個人の家に宗教画でもあるまい。そこで画家に風景を描かせ、絵画が売物となって売買の対象となったのだそうである。そこまでは良いのだが、それからが面白い。風景を描く為には、対象となる自然を見つめなければならない。そこで自然をしっかりと見つめる事にした。斬くして、顕微鏡が生まれ、天体望遠鏡が出来、そして近代科学はオランダから始まった。

つまり将来を予測するには音楽、美術、文芸等々、現代の文化を見つける事である。そうすると将来が見えてくる。と筆者は強調している。なるほどこの話し判らぬわけではない。思い当たる節もある。こじつけて考えてみると、抽象画などと言うものも、今で言うパターン認識と通ずるものがあるかも知れないし、S.F.とか漫画文化もヴァチュアルリアリティーやイメージプロセッシングに関連してくるのか。いやどうもそんな短絡的な発想ではなく、もっと異なる角度からの発想が必要なのかも知れない。等々、いろいろ考えているうちに気が付いた。

つまり自分自身の発想の、あまりにも貧困な事である。先程申し上げた己の腕の届く限りと言う事を、英語では正にその通り、within arm's lengthと言う。この腕の長さがどう考えても短いのである。

フジコーさんの事業展開は、己の保有する中核技術を中心にしておられ、実に美事であると申し上げた。さてこれからの、この難しい時代を乗り越えて行くには、フジコーさんに限らず、我々全てが自らの腕の長さをどうやって長くするかに努力しなければならないのではなからうか。私の右腕は左腕に比べて約2cmほど長い。それは子供の頃から振り回したラケットの故であるようだ。つまり鍛えれば短いものでも長くなる。

フジコー技法の発刊を一つの契機として、フジコ

ーの皆さんが、自己の保有する中核技術は飽く迄も大事にしながら、腕の長さを長くするべく努力され、多方面への発展を遂げられる事を心から念じたい。

略 歴 書

とみ うら あずき
富 浦 梓
昭和7年9月3日

【学 歴】

昭和31年3月 九州大学工学部 冶金学科卒業

【職 歴】

昭和31年4月 八幡製鐵(株)入社
同 43年7月 君津製鐵所 技術課長
同 47年4月 本社 研究開発本部 技術開発部開発企画課長
同 51年4月 同 副部長
同 53年10月 同 経営企画部 鉄鋼企画室長
同 55年7月 研究開発本部 技術管理部長
同 62年6月 取締役 新素材事業本部長
平成3年6月 常務取締役 技術開発本部副本部長

【所属学会】

日本金属学会
日本鉄鋼協会 (理事)
電気化学協会 (副会長)
日本工学アカデミー (理事)
ドイツ鉄鋼協会
アメリカインダストリアルリサーチインスティテュート